

移民の魁・星名謙一郎のブラジル時代

飯 田 耕二郎

はじめに

- 1．ブラジルまでの星名謙一郎
- 2．移民初期の頃
- 3．『南米』新聞について
- 4．二つの植民地経営
- 5．星名の最期の頃
- 6．星名の墓碑建立と現在のアルヴァレス・マッシャード

おわりに

はじめに

本学園は、今年創立80周年を迎えるという。80年前といえば昭和の初期であるが、その頃日本ではブラジルへの移民の最盛期であった。ブラジル移民は、笠戸丸によって初めて日本人の移民を運んでから、2008年6月で100年になる。その日本人移民がブラジルの地に定着し始めた大正の末期、一人のパイオニアが射殺される事件があった。あえなく殺されたその人物とは、星名謙一郎である。彼の名を日本で知る人はまずいないが、ブラジルの日本人移民史では著名な人物である。彼は、ハワイ、アメリカのテキサスを経てブラジルにやってきた。彼は常に移住地においてパイオニアの役割を果たしてきた。筆者は以前からこの星名に関心を持ち、その生涯についてまとめたこともある¹⁾。ここでは、彼の終焉の地であるブラジル時代について、その後筆者が集めた史料に基づいてより詳細に記述したい。それとともに彼の行動を通して初期のブラジルにおける日本人社会の状況を明らかにすることも目的としている。

1．ブラジルまでの星名謙一郎

星名謙一郎は1866（慶応2）年に愛媛県吉田町に生まれ、東京に遊学して東京英和学校（現在の青山学院）を1887（明治20）年に卒業。その後、1891（明治24）年までにはハワイ

1) 拙稿「移民の先駆・星名謙一郎の生涯」『キリスト教社会問題研究』32号、1984年)

島に契約労働者として渡り、まもなくキリスト教の伝道者として活躍した。岡部次郎牧師が、伝道者を求めて日本に帰っている間、彼がハワイ島のヒロ教会を守っていた。岡部牧師が同志社から牧師を連れてハワイに戻った頃、彼は伝道師を辞め、コーヒー栽培をやり、1895(明治28)年頃、ホノルルに出て、税関の通訳をしながら日本語新聞を発行した。1901(明治34)年には、愛媛県卯之町出身の末光久子とハワイで結婚。しかしホノルル時代はさまざまな事件を起こしたり、長女が亡くなるなど不幸が重なり、1904(明治37)年にはアメリカ本土に渡り、同志社社長であった西原清東のいたテキサスで米作を行った。この時、同志社大学の学長となった星名泰が誕生している。

しかし、テキサスでの生活も、久子夫人の父親の病気のため1年ほどで閉鎖し、日本に戻った。帰国後は愛媛県の卯之町と松山で過ごしたが、この時、江上波夫夫人の幸子が誕生している。

2. 移民初期の頃

ブラジルへの日本人移民は、前述のように1908年に第一回の笠戸丸によって渡航した800名近くの移民によって始まった。当初はサンパウロ州奥地のコーヒー農園にコロノと呼ばれる賃金制の契約雇用農民として導入された。そして1914年までに10回にわたり計1万4886人がブラジルに渡航した。

彼は第一回移民の1年半後、単身で渡航している。笠戸丸移民に触発されたのかもしれない。外務省の旅券記録によると、1909(明治42)年12月13日、神奈川県庁より外国旅券が下付されている。旅行地名：ブラジル、旅行目的：商用とあり、その直後に横浜から出港したと思われる。最初、アルゼンチンに渡航したという説もいくつかの書物にみられるが、確たる証拠は見出せない。ブラジルでは当初、リオデジャネイロ州マカエにある山縣勇三郎の農場において、石橋恒四郎のもとで働いていたらしい²⁾。そして1912年頃、石橋とともにそこを出て、同州サンタクルス耕地に、当時のマイナス鉱山移民の逃亡者を集めて水田式米作を行ったが、けっきょく労働者側の不平が原因で失敗に終わったという³⁾。彼の綽名であるジャカレー(鰐)はこの時期、彼が鰐を捕食したためとの説がある⁴⁾。彼はつぎに日本人移民の多いサンパウロ州にやってくる。日本人移民の草分けであった鈴木貞次郎の回想記によると次のようであった。

リオからサンパウロにやってきたのは1915年でサントスのカンポ・グランデの佐賀県人池田(第二回移民)の所にもぐり込んだ。その頃のカンポ・グランデはじめじめした湿地地で、すでに沖縄県人がトタンと板とで粗末なバラックを建て四辺にパセウなどを植え込んでいた所である。池田はモジアナ線のイバテ駅のセーラ耕地を逃亡して、茲で沖縄県人

2) ①『在伯日本人先駆者伝』(パウリスタ新聞社、1955年) 3～4頁。②岸本丘陽「先駆移民の巨歩を遺した石橋恒四郎氏」(『曠野の星』第49号、1958年8月) 47～48頁。

3) 前掲注2)の①、472頁。および『コロニア五十年の歩み』(パウリスタ新聞社、1958年) 62頁。

4) 前掲注2)の①、250頁。

を真似てバラックを建て、電気マッサージ器を買い、ドットールと称して電気按摩をやっていたのである。私が星名と初対面したのは、この池田のバラック建てのなかであった。池田がサンパウロ市に出て来て私に逢う度に

「俺の所に星名という北米から来た偉い人がいる。是非貴方に紹介したいから一度逢ってくれ」という様な話に引かれて、私はサントスに行った。ついでに、池田を尋ねたのであった。逢って見るとジャカレと綽名をつけられた人だけに、金歯をちらと閃かして頑丈な筋肉を顔面にみなぎらしてうそぶき加減にした所は、一寸突忽として屹立した岩石の様な奇怪な感じを与える。話をして見ると世界を股にかけて歩いた人だけにインテリで物解りがよい。そして人に容れられない性格が何処となし私と一脈の通じるものがあった。

サントスに寝転んでいてもしょうがないじゃないか。うむそうだ。サンパウロ市に出て来たまえ。行こうという様なことで別れたが、それから間もなく星名はサンパウロ市に移転して来て、プラスのコンコルディア街（現在のアルメーダ・リーマ街）の同胞の小さなペンソンに宿を極めた。ブラジルに於ける星名の生活がそれから始まったといつてよい⁵⁾。

彼はサンパウロに移り、プラス区の鉄工所の職工として働いていたという⁶⁾。この頃の様子については、星名と同じ北米からやってきた輪湖俊午郎の次の記録が興味深い。

星名はサンパウロに一軒の家を借り毎日遊んで居たが、暮が初段に二、三子とか言ふ噂で、其辺の^{ざる}箒を集めては御馳走し、彼等を相手に徹宵打ち続けて居た。非常な精力家で、若い者は疲れて睡気を催し、交替で寝て起きては星名に掛かって行くのであったが、彼は一向平気であった。実に不思議なおやぢで、斯うして懇意になっても決して彼は暮のこと以外に何が目的でサンパウロに来たのか口にせなんだ。然し若い者は御馳走にさへありつけば、夫れで結構なので、勿論其様な詮議立てをするものはなかった⁷⁾。

これによると、彼はどうもサンパウロで何もせずに遊んでいたようだ。しかし、翌1916年の初め頃、週刊の『南米』と称する雑誌風の謄写版刷りの新聞を創刊した。もちろんハワイでの新聞発行の経験を生かしたものと思われる。これはブラジル、というより南米最初の日本語の言論機関紙であった。この新聞発行に関しても、1917年に石版刷りの『日伯新聞』を発行する金子保三郎とのやりとりについて、2人と関係の深かった輪湖俊午郎が詳しく記述しているので少し長い以下に紹介する。

或時金子は此の星名に、茲で新聞を始めたいと思っているが活字を注文する金がなくて困っていると話した。金子としては此おやぢ金を持っているに相違ないからと、半ば相談の意味で気をひいて見たのである。星名は即座に言ふた。「君、新聞を出すのに活字は要

5) 鈴木貞次郎『埋もれ行く拓人の足跡』(1969年)189頁。なお同書の190頁では、「星名がサンパウロ市に移ってきた年代は多分千九百十三年の終わりか千九百十四年の初め頃、即ち西欧大戦爆發の前後であった様に覚えている」とあり、少し食い違っている。

6) 前掲注3)および市瀬義介「奥ソロカバナ・プレジヨン植民地の開拓苦闘史(5)」(『週刊日系』89号、1964年11月1日)21頁。

7) 輪湖俊午郎『流転の跡』(1941年)127~128頁。

らんよ。謄写版で4、5回も出して御覧、移民会社が金を呉れる、其金で買うのさアハ、ハ、ハ、ハ」。然し金子には星名の意味が呑みこめる程未だ人づれはして居らなかった。「今の時代に謄写版と言ふ訳にも行きませんよ」と水に浮いた木の葉をかくような返事をした。曾て金子に智慧づけてくれた此星名が彼に先き廻りして『週刊南米』^{ママ}を発行しようとは夢にも考えて居なかった。そればかりか星名は金子と同僚の彼(輪湖俊午郎・以下同じ-筆者注)へ、手紙と共に旅費までモンソンへ送って出市を促して来た。金子は彼に対して面目ないのか、事態はここまで来て居るのに、依然何の沙汰もない。彼としてもぞっとして居られなくなったので、兎に角サンパウロへ出る事に決した。

金子に会って見ると「やア、君、誠に濟まんよ。僕も一生懸命奔走したんだが、意外なことばかりで、どうしようもないんだ。もう活字は断念した。と言って今更謄写版と言ふ訳に行かぬので、僕は石版刷で出そうと思ってね、印刷機を聞き廻ったが、皆大仕掛けで日本の手刷りの様な安価のがないんだ。仕方がないから僕が設計して目下大工に作らせている、大丈夫出来るよ。それで君はこちらの準備が整ふまで、星名の所へ行って遊んで居てくれ」との話であった。

妻子を抱えながら、食ふものさへ碌に食はず血眼になっている金子を見れば、彼とて憎むべき何ものもない。そこで金子の云ふ通り空とぼけて「今モンソンから着きました」と星名に挨拶をする。「あ、よく来てくれた、鹿野に書いて貰ふて二人でやっているのだが、仲々忙しいのだよ、今五百刷っている。謄写版の五百は容易ぢやない。時に君、金子に会ったかね、あいつも新聞を出すと言ふて居るそうだが金策が出来ないらしい」「まだ会ひません、其中に会って見ようと思ひます、困っているのは事実でせう。」「金子が出す様になったら君はそちらへ行くかね」「出る様になれば無論行かねばならんですよ。火元は僕ですからね」「ああそうか」と星名は黙した。

『週刊南米』^{ママ}はサンパウロ市外のサンターナと言ふ所にあつて、高台をなした見晴らしの良い家だった。星名は相当金を持っているものと先年から思っていたが、何にせよ一基(kg?)の骨付き肉を三人で朝晩の二回に充てようと云ふ処を見ると、余りあるらしくも思はれなんだ。而も炊事は彼自身がやるのである。茲は高等浪人の溜場で、其頃渡邊孝、三浦鑿、山根寛一と言ふ手合が出入りして居た。

週刊南米社には寝台が二つ外なかつたので、彼は星名と一つ寝台に寝て居たが、星名は夜中の一時頃になると、殆ど定まった様に物凄声⁸⁾を挙げて唸る。やがて其唸りに自身も目覚めて再び眠りにつくのである。「星名さん、どうしたのです。」「僕はね、昔人殺しをしたんだよ。人を殺すと人間は非常に疲労する」と当時を寝物語に語った⁸⁾。

このように、もともと金子保三郎と輪湖俊午郎が日本語新聞を発刊する計画を持っていながら、もたもたしているうちに星名が出し抜いた形で、『南米』新聞を発行してしまったのである。ここで当初、新聞発行を手伝った鹿野久一郎との関係について、先の鈴木⁸⁾の回想記でみてみよう。

8) 前掲注7) 128~130頁。

『南米新報』^{ママ}の発刊は海外興業会社支店の好意で謄写版刷器を無料で頂だし、当時ぶらぶら遊んでいた鹿野久一郎とソーシオ（仲間）で遣れという条件であった。鹿野もなかなか頑張りであるが星名の海千山千の頑張りには及ばない。『南米新報』^{ママ}を発刊したのはよいが、代金が星名一人の懐にはいっても鹿野には一ミルの金も転げ込んで来ない。止むなくコンデ、デ、サルゼーダス街辺りで集めた新聞代でピンガをあほり気焰を上げる外なかった。鹿野に取って是れは当り前を通り越した程の権利であるが、星名にして見れば海興が共同で遣れといってくれた謄写印刷器ではあるが、それは単なる外交辞令で、その実自分に呉れたものだとして解釈している。このくい違いが二人の間に気拙い溝を掘って行った。星名が鹿野の新聞代無断（断ったら星名から取上げられるのが解りきっている）消費の事実を嗅ぎつけて、内心ぶんぶん怒って帰る途上、ぱったりとジレイタ街ミゼルコルディア広場で鹿野と行き逢ったからたまらない。

「おい鹿野貴様は新聞代を消費いこんでいるな」

ジャカレといわれた程のあの醜悪な顔が火のようになっている。

「なに？ 新聞代を消費い込んだ。当り前じゃないか。俺はソーシオだぞ、手前ばかりが権利があると思っているのか、人を馬鹿にするのもいい位にしる」

鹿野も馬靴の様にだだっ広い面貌をふくらして怒鳴った。

「何を生意気な！」

星名のことである。直ぐ鹿野の胸倉を取ったからたまらない。あの体格のよい柔道の心得のある六尺豊かな、昔なら武者修行にでも出そうな体格の持ち主である鹿野のことである。そのまま温和しく引込んでいる様なことは断じてあり得ない。

「俺が生意気なら手前は何だ。泥棒はそっちの事だ」

星名は未だジャカレという綽名のない時であったから、まさかジャカレとは呼ばなかったろう。二人はミゼルコルディア広場で上になり下になり取組み合った。物見高いはサンパウロ市民である。黒山の様に人だかりがして来た。結局二人はポリシアセントラルに引っ張られて行って一夜を豚箱のなかに明かし、翌日釈放されたが、これで鹿野はオトマチック^{ママ}に星名と縁が切れ『南米新報』は星名一人のものになってしまった⁹⁾。

星名の新聞には、このほか輪湖の回想記に名の挙がった人や、木村孝太郎、鈴木季造（鈴木貞次郎の弟）など後年、ブラジル日系社会の指導者となる人物が出入りしていたといわれており、この新聞は覇気のある青年にとって魅力のある存在であったと思われる。

3. 『南米』新聞について

さて、星名が発行した『南米』新聞は、現在、サンパウロ日本移民資料館に1918年1月12日の103号から1918年12月14日発行の150号まで（この間欠号あり）が保存されている。大きさは、菊判？（約16.5cm×23.7cm）、ページ数は48～16で、雑誌風の週刊（毎土曜日発行）

9) 前掲注5) 190～191頁。

謄写版新聞である。発行所は南米社であり、現在のサンパウロ市の北部のサンターナにあって、星名が持主兼発行人、日下生太郎というのが編集人になっている。目次は、社説あるいは論説から始まり、雑報・最近電報・日本近信・投書欄・文芸欄・広告・奥付などで、最後のほうに広告がかなりのページ数を占めている。

はじめは500部、一時は1,000部以上刷ったようである。いつ頃までこの新聞が発行されたかは不明であるが、現存する150号の直後ぐらいで終わったのではないと思われる。いずれにしても、この『南米』新聞はブラジル日本人移民に明るさを与えたというだけでなく、社会意識を芽生えさせたという点でも非常に重要な意義をもつものと思われる。

また、星名はこの新聞で当時ブラジルにやってきた日本人のほとんどを占めていたコロノと呼ばれる貧しい農業労働者の土地定着を論じ、とくに土地購入・植民地(移住地のこと。以下同様)の開設の気運促進に力を注ぎ、彼自身、サンパウロ西方600キロのプレジヨン植民地と、さらに30キロ奥地のパイベン植民地を立ち上げようと、土地を求めて売り出しにかかった。その開設は、ともに1917年である。この当時の『南米』新聞には彼の署名記事もみられる。一例として、第103号の記事の目次および彼に関連する記事を次に掲載しておこう。

No. 103 (1918年1月12日) : (全48ページ)

論説(2ページ) : 移民の耕地逃亡

雑報(2ページ半) : ◎農商務省の種物頒布 ◎日本人の大泥棒 ◎リオよりサンパウロへ大行軍 ◎大正阿波鳴門△あはれなるイスパニア少年の物語 ◎社主一行のプレジヨン行 ◎久谷健之助氏 人事来往

最近電報(半ページ) : ◎支那借款 ◎露勃媾成立 ◎独逸の国境封鎖

世界大乱(3ページ) : 第一次大戦関係ニュース

日本近信(7ページ) : ◎海軍更迭発表 ◎寺内首相與党に豫算案内示 ◎タチアナ姫は東京に潜伏中 など政治、軍事、社会ニュース

投書欄(2ページ) : ◎片々録 洛東生 ◎進海人乎

ヴテリナリオ(寄書)(2ページ) : ◎鶏の管理と疾病 隆亮

蟻の世界(2ページ) : ◎害蟲に就て 其二

文芸欄(2ページ) : ◎大懸賞応募俳句 ◎大懸賞応募和歌 ◎新春雑詠

プレジヨン植民地の創設 南米社々主 星名謙一郎(4ページ)

広告(18ページ) : ミカド商会(日本食料雑貨店・日本新聞雑誌並南米週刊新聞取次販売所) 大原順一郎工作所(大原唐箕)

伯刺西爾拓殖会社代理店東洋移民合資会社出張所(イグアペ植民地視察者の為め道案内) 森部洋服店(移転広告) 日本旅館(HOTEL IMPERIO JAPONNEZ) 亜米利加ホテル 英国南米銀行 梅弁植民地(星名謙一郎) テーエム合名商店(伊藤家庭薬など雑貨) 矢部洋服店 川口司生堂療院 土地売却(ノロエステ線エクトル・レグラー駅) ルス中央旅館 ブラジル語実用会話編(南米社) 村野旅館(御旅館及料理) サントス港名嘉文五郎

（客用自動車） 齒科医山中信一（開業披露） 上地弥蔵（旅館）
南米社（唐箕および売貸地） 米国医学士伊藤庄吉（診察） 精撰
セラー珈琲 アンツーン・ドス・サントス商会（日本郵船・大阪
商船代理店） 司生剤合名会社（家庭常備薬） 藤崎商会 神田栄
太郎（醤油製造） 朝日床（城間嘉助）

告示（在サンパウロ帝国総領事館）および奥付（1ページ）

◎社主一行のブレジョン行

先週末要務を帯びてリベロン市に赴かれたる社主星名氏は此度び新たに購入せられたるブレジョン殖民地々勢調査の爲め測量部担当技師久谷健之助氏同伴一行六名本日午後七時十六分の汽車にて再びブレジョンへ向け出発せられたり

◎久谷健之助氏

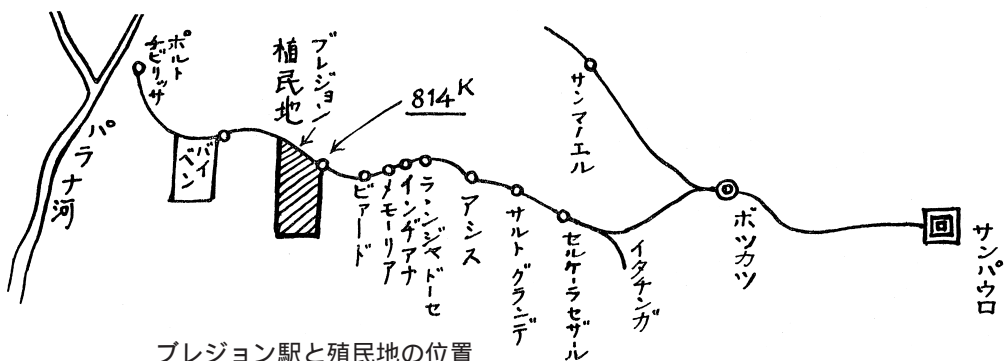
此度ブレジョン測量担当技師として傭聘せられたる久谷健之助氏は久しく島根県立農林学校教諭として測量林学測量実習等を受持ち又公有林整理等を爲し其道には深く経験ある事なればブレジョン殖民地入殖者の爲めには多大の便宜を得る事なる可し。

ブレジョン殖民地の創設 南米社々主 星名謙一郎

私が昨年七月一日を以て理想的永住地梅弁殖民地を諸君に御紹介致しましてから僅かに六ヶ月を経過致しましたのみであります、此短期間に於きまして我同胞諸君の該地区を御購買に成りましたる面積は既に参千アルケールスに達しまして鉄道沿線の如きは一ヶ月を出でざる内に売り切れとなるの盛況を來たしまして最近御契約致しましたる地所は線路を離る事拾三キロメートル余の遠隔の所となりました、夫れにも係はず尚続々と御申込みになり相成りまする面積は到底既定の五千アルケールスにては不足を告げ諸君の御渴望を充す事が出来ないと云ふの徴候が現はれましたので如何にして之を補充するの策もがなと苦心致しました結果として爰に

ブレジョン（BREJÃO）殖民地と云ふのを選定致しました。既に梅弁を御視察に成りましたる諸君は何れもブレジョンを御通過に成りまして具さに其地理と其地味とを御承知になつて居る事と存じますが、此ブレジョン停車場と申しまするは梅弁駅よりは二ツ手前の停車場にて、聖パウロ市の方に式拾八キロメートル丈け近い距離にある停車場であります。此処の鉄道工事は既に完成し、ブレジョン停車場敷地は現に其地均らしに着手して居ります（大正六年十二月二十日）。

汽車の通ずるのは二月末日までは待たぬと鉄道技師の声明で御座ります、之れを略図に依つて示しますと、



ブレジョン駅と植民地の位置

該地方を御視察になった諸君は御承知の通り旅客列車は現にインディアナ駅まで開通して居りまして其次のメモリア駅と又其次のヴィアード駅とは既に停車場の建築が竣成して居りまして毎日土工の列車が運転して居ります、ブレジョン（又はレモエイロ）駅は其次にありましてヴィアード駅よりブレジョン駅迄は其距離十四キロメートルある耳であります、私は此ブレジョン停車駅を去る事七百三十二メートル聖市よりの標木八百十五キロメートルの地点より八百二十一基米に至る延長六キロメートルの鉄道沿線に対する奥行十二基米余の一區画を購入致しましたから之をブレジョン植民地として諸君に提供致さんと欲するので御座います、

植民地の地質並水質

は梅弁と酷似し樹木は梅弁と比較して更に巨大なる者があります、海拔は梅弁よりは高く全般に於て前者に優るとも劣らぬと云ふ事を確言致す事が出来ます更に左の事実をご紹介致します、

小笠原尚衛氏の土地選定

去年八月伯刺西爾に於て土地購買の目的を以て遙々日本より御到来になりましたる北海道の小笠原氏は過去四ヶ月間聖州の全部を踏査し遠くパラナ州迄も視察に赴かれましたが自分の永住地としては何処にも理想的の所が見当らぬと言ふて今日迄買入れをば躊躇して居られました然るに私が梅弁地方の地質の豊饒なる事交通の至便なる事等を御説明致しまして梅弁に次ぐ可き新植民地計画の事を御話し致しましたる所夫れでは一応視察して見よふと申されまして三週間程以前に当地御出発前後二週間に亘りてブレジョンより梅弁一帯の地所を調査成されまして帰聖の上斯の如き豊饒肥沃の交通便利の所が有らうとは夢にも知らなかつたと申されまして

千よろずのたから秘めけり森深くくろかね道のあちらこちらにと云ふ歌を寄せられまして同地方が豊沃なる処女林地で農耕には最も適当なる土地で有ると云ふ事を讃せられまして此所に広大なる地積を購入し大農式農業を經營せらるゝ事となりました此事実を見ましてもブレジョン植民地が如何なる所であるかと言ふ事を十分に説明して居る事と信じて居ります、

ブレジョン植民地の面積と其価格

売却面積 参千アルケールス（七千五百町歩）

売却価格 壹アルケール 現金六拾五ミル 年賦七拾五ミル

土地の登記

地権の確実なる事は梅弁殖民地購買者に交付したる数十件の正式登記に依って完全なる地券を交付したる事に依って明瞭なれば何等疑ふの余地なく、代金の支払いと同時に聖市に於て登記を行ひ完全なる地券を交付致します、

測量師の派遣

ブレジョン殖民地の測量主任として日本技師を囑託致しましたから本月十五日以内に派遣常住致さず手筈と成って居ります此以前に実地視察御希望の諸君には特別の御取計ひを致します、

梅弁殖民地との関係

此度の殖民地と梅弁殖民地とは互に近距離の間に在り其利害を共通して居ります事なれば双方相援助して該地方同胞発展の中枢たらん事を期して居ります、

以上、

尚委細の義は左記宛御照会あらん事を乞ふ

SR.K.HOSHINA, CAIXA 1374, S.PAULO

大正七年一月一日 星名謙一郎

4. 二つの植民地経営

ヴァイベン植民地は土地名 Vai-Vem を模して星名が梅弁と命名したもので、ソロカバナ線サント・アナスタシオ駅西北方2キロから8キロの地に展開する950アルケールの土地を斡旋した。これは松村総領事が持ちかけた話を星名が引受けたものといわれる。当時のブラジル在住日本人は松村総領事の勧誘などもあり、コロノ生活から独立農へと転進しようとしていた。1915年に平野運平がノロエステ線にトーレス・バラス植民地を開拓したのは有名であるが、梅弁植民地はこれに次ぐ2番目の日本人の植民地といわれる。それは1916年という説¹⁰⁾もあるが、先の新聞記事によると1917年の7月であろう。

また、ブレジョン (Brejão) 植民地は、同線アルヴァレス・マッシュャード駅付近の土地約3000アルケールを梅弁植民地の場合と同様、コンパニア・ファゼンディロスから買い、売り出した。この時、日本から小笠原尚衛が大金を懐にして土地を買うという触れ込みでブラジルにやってきたが、小笠原は星名と合資でこの植民地を開拓することとなった。後に星名にまつわる様々な悪評はこの植民地の土地の売買に絡んでのことである¹¹⁾。

小笠原尚衛は高知県出身、同じ高知出身の武市安哉の聖園農場第三次入植者として1895年北海道樺戸郡浦臼に移住。しかし毎年のおこる石狩川の氾濫のため、1902年に名寄へ、その後間もなく中川郡美深に行き、そこで宗谷線切っの農業経営をしていた¹²⁾。ところが、聖園農場第一次入植者で、星名と同じ東京青山学院出身で海外植民学校校長をしていた崎山比佐衛の南米移住事業に共鳴し、尚衛の父である91歳の吉次をはじめ、一族47名が他の家族13名と共にブラジルに渡り、松村総領事の紹介で、星名と知り合ったのである¹³⁾。そ

10) 前掲注3)『コロニア五十年の歩み』、62頁。および前掲注5)194～195頁。

11) 同前。

12) 『聖園教会史』(日本基督教会聖園教会、1982年)。

の彼が、この植民地に100アルケール前後の土地を残した以外にほとんど無一文の状態に陥り、星名との土地共有から離れなければならなくなり、逆に大した資本もなかった星名は売り残された何百アルケールの土地独占することになったのである。このような事実からすれば、小笠原が星名に騙された形であるが、鈴木貞次郎が星名に問い質したところによれば、プレジヨン植民地の土地代の第1回支払いは小笠原の金で支払い、第2回は双方で出金したが、第3回の支払いに当たって小笠原は一文の金も負担することが出来なかったので、止むなく小笠原の出資高に対する土地を渡して共同を打ち切ったというのが事実のようである¹⁴⁾。

プレジヨン植民地については、『拓魂 アルヴァレス・マッシャード五十年史』という書物があるが、ここではこれら2つの植民地のその後について、星名が亡くなる1926年頃までの発展のあらましを記しておく。プレジヨン植民地の最初の購入者は小笠原尚衛の200アルケールである。1918年2月に福岡県人の毛利哲夫兄弟が先駆し、ついで福岡県人井手磯太郎、熊本県人西村栄吉らが入植した。同年11月には小笠原一族6家族が移住してきた。1919年には三重県人井関清太郎、前畑久五郎兄弟、福岡県人高田伊三、福島県人本田虎之助らの入植を見て、同年度末には30家族による同植民地の開拓が始まった。これより以前、1917年

図1 サン・パウロ州・パラナー州要図



には千葉県人向井捷次郎、長崎県人渋谷駒平が星名の下に測量隊として入植しており、鹿児島県人徳田八十八は鉄道工夫としてこの地にいた。入植当時、鉄道はインジアナ駅までで、町もインジアナ駅の町しかなく、食料など生活必需品を求めるのも、徒歩2日野宿して、50キロの山道をインジアナ町まで通ったという。開拓当初は綿花、米を試みたが成績はよくなかった。カフェも大霜の害にあい全滅。パタタ(ジャガイモ)の栽培も失敗した。しかしその後、植民者の増加と農事改良により、プレジヨン植民地は再び活気を呈するようになった。1923年の調査で、在住の家族数は地主67家族、借地・コロノ84家族、合計151家族の集

13) 前掲注12) 384頁。および吉村繁義『崎山比佐衛伝』(海外植民学校校友会出版部、1955年) 124~125頁。

14) 前掲注5) 195頁。

団となり、カフェ樹6万2000株、米5000俵、綿花2万アローバ、ミーリオ（とうもろこし）1万俵、フェイジョン（豆）5000俵、パタタ3000俵の収穫があり、ソロカバナ沿線では最高となるに至った。1924年6月3日に田付七太大使の植民地視察があったが、小学校での歓迎会の席上、星名謙一郎は植民地の建設の苦勞を述べるに当たり、万感胸に極まって嗚咽したという。しかし、1924年の綿花好景気時代も6月革命で急転直下した¹⁵⁾。なお、プレジョン（第1）小学校は1919（大正8）年12月に開設された（ブラジルで第10番目の日本人小学校）。そして1926（大正15）年までに、第4小学校まで完成している¹⁶⁾。

プレジョン植民地よりさらに20キロ奥にあったヴァイベン（梅弁）植民地には、先発隊として福島県人神尾仁太郎、同安齊亨、愛媛県人稲田留蔵、同 幸野好栄、広島県人三島兄弟らが自ら購入した土地を開墾すべく1917年6月に、当時ソロカバナ線の終点であったインジアナ駅から71キロの険路を突破して入植、次いで福島県人斉藤金太郎、同 紺野安吉、同 穴戸源徳らが入植して開拓を始めた。1918年には長崎県人渋谷駒平、広島県人目崎松衛門、愛媛県人澄沢皆衛、鹿児島県人上園伝蔵、福島県人本田朝生らが入植して20家族となった。入植後間もなく大霜害にあった屈せず、綿花栽培が当たって一息つき、1919年に多数の入植者を迎えて、ようやく植民地を形成するに至った。さらに同年にはこれまでの米、綿花に加えてカフェの栽培が、愛媛県人山田秀雄、広島県人西原好次郎によって試作され、その後の発展の基となった。また1919年には日本人会、1920年に梅弁小学校が開設された。1923年の調査では、土地所有者60家族、借地7家族、合計67家族で、面積950アルケール、カフェ樹12万8900本、収穫米4900俵、綿花4400アローバ、ミーリオ8120俵、フェイジョン2500俵、パタタ1000俵と養豚3500頭で、他に安倍利平と上園伝蔵のピンガ（酒）製造工場があった¹⁷⁾。

5．星名の最期の頃

星名は、妻子を日本に残してブラジルにやってきたが、この頃お玉さんという40歳近い女性とアルヴァレス・マッシュードで同棲していた。ところが、1925年、星名は土地問題で反対側にたつブラジル人の襲撃を受けた。それがもとでお玉さんは射殺されてしまった。その時の新聞記事は以下のものである。

物騒なプレジョン 星名氏宅襲撃さる

腹部貫通傷を受け お玉さんの最後

屢々刃傷沙汰やピストル騒ぎの演ぜられるプレジョン植民地はさても物騒な事よ、去る七日未明に同地方邦人植民の開祖として有力な星名謙一郎氏は、けたましく吠え立つる飼犬の声に目を醒まし、きま耳を立てると何やら囁き合ふ人声の聞ゆるに、寝台から飛び下りピストルで武装して庭先へ降り立ち、戸の隙間からまだ明けやらぬ暁の闇をすかし

15) 中村東民『ソロカバナ邦人発展史“極光林”』（パウリスタ情報社、1964年）79～80頁。なお、アルヴァレス・マッシュードの社会学的調査結果については、島澄「地方小都市日系コロニヤ ソロカバナ線アルヴァレス・マッシュードの事例」（泉靖一編『移民 ブラジル移民の実態調査』、古今書院、1957年）。

16) 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史下巻』（同刊行委員会、1942年）379～381頁。

17) 前掲注15) 92頁。

て窺ふと誰とも知らぬ四五人の人影あり葡(ポルトガル)語にて語り合ひつ、同家襲撃の相談らしかったのに星名氏は、威嚇の為にピストルを一発々射した刹那、門前の黒き人影の中からピストル二発之に答へて家内へ射ち込んだ一発は同氏の左腕を傷つけ、他の一発は寝台のかげに身をかくしていた同棲のお玉さんの背部から腹部へ貫通し『やられたッ』と叫んで倒れるのを見た氏は、弾のかぎり戸外へピストルを乱射し怪しの一団を逃走せしめた後、付近の誰彼を呼び起こして助力を乞ひ、血に染んで倒れていたお玉さんに応急手当を施し、午前八時の列車に投じて出聖(サンパウロ)し、ウンベルト一世病院へ入院せしめた四十時間余の汽車の旅中も入院後も、お玉さんは元気よく、九日高岡ドツトルも立合って手術した後も経過極めてよかったが十日服薬後容態急変し医師の来診する間もなく絶命し、十一日午後二時同病院出棺アラツサ墓地へ葬送した、先年イピランガ紅灯界に嬌名をうたはれ、沈溺者間に第一人者として随気の涙を流さしたお玉さんも、かうして悲しい最後をたどって逝った、尚ほ此襲撃は遺恨か物奪りか判然せず伯国人ばかりでなく、日本人も交っていたらしかつたとも云ふが、屋外から寝所をねらって射ち込んで二発とも命中せしめるなどから見て、余程よく家内の様子を知っている者達の所為らしいと、尚同地方には革命軍脱走兵のなれの果が多数徘徊し又はカマラダ等になり農業は知らず武器を有し気が荒いので、該地住民は非常に危険を感じている¹⁸⁾。

このことがあって約1年後に星名も暗殺されることになる。当時、ブラジル経済、ことにサンパウロ州ではコーヒーによって支えられていた時代であったが、実に不況にあえいでいた。その主たる原因は、1924年に起こった革命戦、そしてサンパウロ州を襲ったイナゴの群、また運悪く大旱魃と打ち続く天災に遭遇して、日本人農家は営農資金に貧していた。そこで上塚周平が起こした、日本政府からの低利資金借款運動の奥ソロカバナ線の代表推進役として星名が参加したのである。いわゆる八五低資と呼ばれる日本政府からの救済資金は85万円で、そのうち星名にきた金は9万円ほどだったが、この話が出たのは1924年6月で、実際に資金の出たのが1926年の12月であった。12月13日午前6時半、星名はこの資金の一部を受け取るためにアルヴァレス・マッシャード駅で汽車を待つうちに射殺されてしまった。犯人は自分の使用人カマラダだったという¹⁹⁾。

星名が暗殺された後、当時の様々な日本語新聞がこれを報じた。そのうち『聖州新報』の記事を次に掲載する。

悲惨な最後を遂げた星名謙一郎翁 些細な事から一外人に……

本月十日低金利資金の問題にて来芭(パウルー)し、多羅間領事と打合せを終わり十二日帰殖したブレジョン殖民地の雄、星名謙一郎翁は翌十三日午前六時半頃ア、マッシャード駅頭にて一外人のエスピンガルダ(銃)に斃れ、六十一を一期として悲惨な最期を遂げた。

18) 『伯刺西爾時報』422号(1925年11月13日)。

19) 前掲注3) 『コロニア五十年の歩み』、53～54頁。および宮下良太郎『拓魂 アルヴァレス・マッシャード五十年史』(アルヴァレス・マッシャード連合日本人会、1968年) 75～77頁。松林昇治郎『風化する拓人の記録上巻』(1977年) 90～91頁など。

加害者はジュゼ、プレシテス、デオリベイラ（三十五六）と云ひ、約一ヶ月程前同氏の耕地に四年契約をなし登記も済んで居た。が契約後の彼は殆ど請負畑の手入を怠り他にカマラダ（日雇い）に行くので、星名氏は「こんなに荒しちゃ困る、バガする事は出来ん」と再三注意をしたが其の都度彼は「バガせねば他に働くより外ないから畑は美しくならん、先にバガして呉れ」双方は何時も水掛論に終って居た。

同じマッシャード駅にデンチスタ（歯医者）をして居るオリベイラのソグロ（しゅうと）がある、平素の行為が余りに良くない為め同地の人々からは忌み嫌はれて居た。斯うした輩が裏面にあつて彼を煽動した為めだらう、今から二三ヶ月前星名氏に訴訟を起し、結局星名氏がニコトス程支払ひ四年契約を破棄して彼との関係は美しく解決して居たとの事である。

その後ソグロはオリベイラに対し色々過激な罵倒を浴びせるので寧ろ彼はソグロに反感を持つやうになった。

遭難の当日星名氏は低利資金の問題でプ、ブルデンテに同志十余名と同行することになって居たが、何かと手配があるから一足先に行くとして只一人一同より約一時間程前、六時四十五分発の汽車に乗るべく木村商店から出た。デンチスタの家が丁度木村商店の向側になっている為め、その時只一人行く星名氏を見たんだらうとは人々の噂だ。

すぐ後ろからつけて来たものらしい、氏の斃れていた場所はプラットホームで、着いて間もない時であったさうだ。無惨にもエスピンガルダは右耳部に命中し、半句の遺言すらなし能はず絶息してしまった。急報に接してパウロ領事館より古関氏現状調査に出張因みに星名氏には二人の愛子が母国に残しあり、一人は京大工科に、嬢は京都の同志社女学部を卒業し英語専修科に何れも在学中、茲一二年の内には是非帰国し真の温みに浸り度いと翁が常に申す言葉だった。誰知らう此の一寸先の遭難を……奇しき運命の皮肉と云はうか愛妾お玉さん散って一年四十九日とは……

翁の遺言書は氏の金庫内に蔵されて居ると知人間に噂されている

多羅間領事が母国の遺族に打電した訃音に対し、御芳志を感謝する万事宜しく頼む、との返電があった²⁰⁾。

6．星名の墓碑建立と現在のアルヴァレス・マッシャード

星名が亡くなって何年かして、数人の者が名を連ねて日本語新聞に星名の墓碑建立のための寄付金募集の広告を出したことがあった。これに対して当時のアルヴァレス・マッシャード日本人会会長であった山下定八は、星名は殖民地開拓の功労者なので、数人の発起で立てるべきでないとの意見を出し、墓碑建立は結局、日本人会の事業となった。1935年に日本人会が発起となって寄付を募りニコトスを集め、サンパウロ市の専門家に石碑を注文し、12月頃に墓碑が建立された。星名の死後9年目のことであつた²¹⁾。

20) 『聖州新報』第259号（1926年12月17日）

21) 前掲注19) 『拓魂 アルヴァレス・マッシャード五十年史』、47～48頁。

筆者は、彼の終焉の地であったサンパウロ州のアルヴァレス・マッシャード市に1999年9月訪れる機会があった。中南米諸国で唯一の日本人墓地が市の郊外にあり、784人の日本人が眠る墓地の一面に星名の名を刻んだ石碑が高く聳えていた。その墓前で合掌し入植当初の苦勞を偲ぶことができた。初めての日系人市長の勝谷ルイス孝氏も会いに来てくれた。彼からいろいろ話を聞き、市のパンフレットもいただいた。それによるとアルヴァレス・マッシャードはサンパウロ州の西部にあり、サンパウロ市からの距離576km。市の人口は約2万1400人、人口の15%が日系人とのこと。日本人は当初、コーヒーを栽培したが、その後、綿、落花生、ハッカなどを栽培した。現在日系人は商工業、野菜・果物(ぶどう)栽培、養鶏、酪農などが盛んで、特に牧草の種販売、トラクターの部品製作で大きな役割を果たしている。

おわりに

『ブラジルにおける日本人発展史上巻』によると、彼は、ブラジルではかなりの産をなしながら、茅屋に住み、愛犬とアンタ(猿)を飼い、移民の孤児を養いながら生活していた。また、彼のことを次のように評している。「非常に意志の強い人であって、時には無慈悲にさえ見えたが、決して私利私欲の徒ではなく、一面高き識見と熱き涙とを有していた²²⁾」。彼はその風貌や性格からジャカレー(鱧)と呼ばれ、誤解されやすかった面もあったと思われる。しかし彼の識見と信念と行動力は、当時の日本人移民の水準をかけ離れ、多くの人々は彼の真意を洞察できなかったのではないだろうか。

彼は、ハワイ・テキサス・ブラジルというそれぞれの地域において、日本人移民の草創期において、つねに「移民の魁」と呼ぶにふさわしい活動をしてきた。ブラジルにおいては、最初の日本語新聞である『南米』を発行し、当時の青年たちを魅了した。また、プレジョン植民地とバイベン植民地を創設し、この地方の日本人発展の基礎を築いた。もし彼がいなければ、この地方の今日の発展はなかったかもしれない。さらに、日本人入植者の窮状を救うために、上塚周平らと図り、世に言う八五低資の獲得のために奔走した。本文では触れなかったが、ブラジルにおける日本人野球クラブの嚆矢である「ブラジル日本人青年会」、後の「ミカド運動倶楽部」は、松村総領事の援助によって星名が創設したものである。サンパウロ市における1916年のことで、星名は監督兼渉外係だったという²³⁾。

彼の事業は生前には必ずしも正当な評価が与えられなかったが、残した功績は大きい。とにかく彼は1ヶ所に留まった人物ではなく、日本人移民の草創期にあちらこちらで活躍した人物であった。つまり行動範囲が広すぎたため、かえって彼の全貌を捉えにくくしてしまい、これまで知られざる人物にしてしまったのかもしれない。

22) 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史上巻』(同刊行委員会、1941年)、385頁。

23) 前掲中16) 563~565頁。および前掲注3)『コロニア五十年の歩み』、62頁。

参考文献

ブラジルの日本語新聞・雑誌：

『南米』、『伯刺西爾時報』、『聖州新報』、『曠野の星』、『週刊日系』

書籍：

輪湖俊午郎『流転の跡』（1941年）

青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史上巻』（同刊行委員会、1941年）

青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史下巻』（同刊行委員会、1942年）

吉村繁義『崎山比佐衛伝』（海外植民学校校友会出版部、1955年）

『在伯日本人先駆者伝』（パウリスタ新聞社、1955年）

泉靖一編『移民 ブラジル移民の実態調査』（古今書院、1957年）

『コロニア五十年の歩み』（パウリスタ新聞社、1958年）

中村東民『ソロカバナ邦人発展史“極光林”』（パウリスタ情報社、1964年）

宮下良太郎『拓魂 アルヴァレス・マッシャーダ五十年史』（アルヴァレス・マッシャーダ連合日本人会、1968年）

鈴木貞次郎『埋もれ行く拓人の足跡』（1969年）

松林昇治郎『風化する拓人の記録上巻』（1977年）

『聖園教会史』（日本基督教会聖園教会、1982年）

〔付記〕本稿の資料収集にあたっては、大阪商業大学比較地域研究所の研究プロジェクト「グローバルイゼーションの中のアジア経済と社会」班の研究費を使わせていただいた。

